



front page essay

小野正嗣

一つの並んだ背中



Raimund Hoghe: "Sans-titre" Faustini Linyekula ©Rosa Frank

それでも言葉である。言葉である以上意味を運ばざるをえない。何よりも私たち読者がいる限り意味からは自由になれない。かりにその詩に具体的な物語を読みとることができずとも、詩によって与えられたわけわからなさや感動に、私たちはどうしても意味を与えずにはいられないからだ。受け取ったものを他者に伝えるには意味が必要なのだ。身体表現についてもまったく同じことが言えないか。ホーゲとリニエキュラの二つの身体の動き——歩く、横たわる、踊る、小石を体に乗せる——は、いったい何を象徴しているのか？ 私たちはそれを言葉によって置き換え、その意味を求めようとする。つまり何らかの物語を見いだそうとする。

作品は、私たちが播きざり、混乱させ、私たちのなかにある物語の欲望を喚起する。理解したいと思う私たちは、自分が蓄積してきたさまざまな知識や経験を引っぱりだしたり並べ替えたりしながら、そこにひとつながりの意味を与え、語ろうとする。ホーゲが長いあいだピナ・パウシュの協力者であったことや、リニエキュラが彼の故郷コンゴの激動に満ちた現代史を背景にしたダンス作品を作ってきたことを知っていれば、あるいはドイツ人のホーゲが「Sans-titre」というフランス語のタイトルを選び、*gans* という語が喚起する *sans papers* (不法滞在者) などの言葉を意識していることや、リニエキュラが強制送還される不法滞在者を念頭に置きながらラシーヌの『ベレニス』を演出したことを知っていれば、移民差別や人種差別、植民地主義の歴史を射程におさめた作品の持つ政治性について語ることもできるのかもしれない。あるいは、そうしたことを知らずとも、ホーゲの先天的な骨形成不全から歪んだ体と

リニエキュラの完璧ともいえる体との共存が、美と醜、あるいは正常と異常といった境界線の曖昧さ、いかにわしさを際立たせながら、最終的には私たちの美的な感覚を解放してくれることの感動について語ることもできるのかもしれない。

人によってそこから紡ぎだす物語は異なる。それらがびつたり重なり合うことはない。誰一人として自分の作った物語に確信が持てない。だが、それは舞台で演じる二人のアーティストたちも同じだろう。芸術作品は正解を教えてくれない(たぶん作品自体も正解を知らない)。作品を観る者のひとりひとりが、そこから物語の種を受け取ればそれで十分なのだ。

ホーゲとリニエキュラは何度も前屈みになり、両手と頭をだらりと垂れる。自分を何かに差し出しているように見える。それは同時にその何かを受け入れることでもある。与えるとは受け取ることなのだ。作品の最後で二人はたがいの肩に手をまわす。横に並んだ、まったく異なる印象的な二つの背中が、舞台をジグザグに歩きながら、ゆっくりと観客に近づいていく。二人の人間がそこにいて、ということの奇跡に心を打たれる。与えることと受け入れることは、人が二人いなければ成り立たないからだ。二つの背中はたがいの物語を受け入れながら、私たちにいまその種を僕は必死で発芽させようとしている。

◇おの・まさつぐ 一九七〇年生まれ。作家、フランス語圏文学研究者、パリ第8大学文学博士。現在、明治学院大学講師。著書に、『にぎやかな湾に背負われた船』(朝日文庫、三島由紀夫賞受賞)、『浦からマグノリアの庭へ』(白水社) ほか。

愛書狂

古書マニアや蔵書家の敵は、火、水、それにカミさんだ、なんてことをよく申します。理解がないと、次から次へと本を家に持ち込む亭主は、暮しをあらゆる意味で圧迫する暴君なんですね。いや、ひと事じゃありません▼神保町の古書店を舞台にした映画「森崎書店の日々」の中でも、近代文学のコレクターの客が、若いカミさんに、知らないうちに蔵書を処分されて参っている姿が描かれていました。詩人の清水哲男さんは、古い「少年マガジン」のコレクショ(古書価高し)を、勝手に売られてしまった、とエッセイに書いていた。おお、怖い▼われわれ本好きの間で、しばらく話題になったのが、岸部シロー事件。某民放の情報番組の企画で、風水に詳しいお笑い芸人が岸部宅を訪れ、あれこれ指導した。古書マニアの岸部の蔵書を見た彼女は、「古い本を溜め込む人の頭には、ほこりがかぶっている」と発言。そんなアホな！▼そして、岸部の留守中に、新古書チェーン店を呼んで、蔵書を買っぱらってしまった。そのなかに、集英社版の「吉田健一著作集」全三十二巻があり、一冊二十円と査定された。三十二冊でたつた六百四十円。本の値打ちより美醜だけで査定されるとうなる。古書店市場の相場では、美品で二万五千円から二万円。帰宅した岸部はただ茫然▼番組終了後、件の風水芸人のブログには抗議、批判のコメントが殺到、即炎上となった。吉田健一が一冊二十円、という暴挙が本好きのハートをいたく傷つけたというわけだ。「断捨離」ブームに背を向ける一席、お粗末さま。(野)

奥に一本のろうそくの炎が頼りなげに揺れ、中央に十数個の小石が寄せ集められた薄暗い舞台の袖に二人の男が、二つの身体が、現われ、たがいに向かってゆつくりと歩き出す。ひとつはかなり小柄で胴体が押しつぶされたりかのように背中が大きく盛り上がった。もうひとつはすつと背筋の通った実に均整のとれた体だ。白いシャツの上に見える顔の肌は黒い。二つの体がすれちがう。そのまま舞台の縁に至ると反転して、再び舞台の上で交差する。それがくり返される。その間、視線が交わされることはない。それぞれが自分の行き先だけをじっと見つめている。

二つの体がシャツを脱ぐとその対象は際立つ。若く黒い男、フォスタン・リニエキュラの、無駄な肉のない美しい筋肉質の体が踊る。いや、それはダンスではないのかもしれない。背中の筋肉はそれ自体が独立した生き物であるかのよう。宙に浮かんだ黒い両腕を自らの触角として世界の表面をまさぐりながら、激しくうごめき、男の皮膚を破って

外に出ようとしている。一方、床にうつぶせになって動かないライムント・ホーゲの透き通るような白い体の背中には背骨が湾曲してできた瘤がある。リニエキュラが両手いっぱい舞台の小石を拾い上げる。ホーゲの歪んだ体の上に、背中に盛りあがった白い丘のかたちをなぞり確かめるように、ひとつまたひとつと小石を並べていく。

ホーゲがリニエキュラのために作った「無題 Sans-titre」をプレストの劇場 Le Quartz で観た。作品のなかでホーゲもリニエキュラも一言も発しない。ダンスなどのパフォーミング・アートほど、物語(ストーリー)やナラティブと言つてもよい)からほど遠いものはないように思える。そういう意味では、ダンスの身体は詩の言葉に似ているのかもしれない。詩を読むとき、私たちは言葉の響きに打たれる。思いもよらない言葉の結びつきや、表現の美しさ、あるいは歪みやねじれに息をのむ。言葉そのものに、そのかたちや色、運動に視線を奪われるのである。だがそれは

それでも言葉である。言葉である以上意味を運ばざるをえない。何よりも私たち読者がいる限り意味からは自由になれない。かりにその詩に具体的な物語を読みとることができずとも、詩によって与えられたわけわからなさや感動に、私たちはどうしても意味を与えずにはいられないからだ。受け取ったものを他者に伝えるには意味が必要なのだ。身体表現についてもまったく同じことが言えないか。ホーゲとリニエキュラの二つの身体の動き——歩く、横たわる、踊る、小石を体に乗せる——は、いったい何を象徴しているのか？ 私たちはそれを言葉によって置き換え、その意味を求めようとする。つまり何らかの物語を見いだそうとする。

作品は、私たちが播きざり、混乱させ、私たちのなかにある物語の欲望を喚起する。理解したいと思う私たちは、自分が蓄積してきたさまざまな知識や経験を引っぱりだしたり並べ替えたりしながら、そこにひとつながりの意味を与え、語ろうとする。ホーゲが長いあいだピナ・パウシュの協力者であったことや、リニエキュラが彼の故郷コンゴの激動に満ちた現代史を背景にしたダンス作品を作ってきたことを知っていれば、あるいはドイツ人のホーゲが「Sans-titre」というフランス語のタイトルを選び、*gans* という語が喚起する *sans papers* (不法滞在者) などの言葉を意識していることや、リニエキュラが強制送還される不法滞在者を念頭に置きながらラシーヌの『ベレニス』を演出したことを知っていれば、移民差別や人種差別、植民地主義の歴史を射程におさめた作品の持つ政治性について語ることもできるのかもしれない。あるいは、そうしたことを知らずとも、ホーゲの先天的な骨形成不全から歪んだ体と

リニエキュラの完璧ともいえる体との共存が、美と醜、あるいは正常と異常といった境界線の曖昧さ、いかにわしさを際立たせながら、最終的には私たちの美的な感覚を解放してくれることの感動について語ることもできるのかもしれない。

人によってそこから紡ぎだす物語は異なる。それらがびつたり重なり合うことはない。誰一人として自分の作った物語に確信が持てない。だが、それは舞台で演じる二人のアーティストたちも同じだろう。芸術作品は正解を教えてくれない(たぶん作品自体も正解を知らない)。作品を観る者のひとりひとりが、そこから物語の種を受け取ればそれで十分なのだ。

ホーゲとリニエキュラは何度も前屈みになり、両手と頭をだらりと垂れる。自分を何かに差し出しているように見える。それは同時にその何かを受け入れることでもある。与えるとは受け取ることなのだ。作品の最後で二人はたがいの肩に手をまわす。横に並んだ、まったく異なる印象的な二つの背中が、舞台をジグザグに歩きながら、ゆっくりと観客に近づいていく。二人の人間がそこにいて、ということの奇跡に心を打たれる。与えることと受け入れることは、人が二人いなければ成り立たないからだ。二つの背中はたがいの物語を受け入れながら、私たちにいまその種を僕は必死で発芽させようとしている。

囁きと密告 スターリン時代の家族の歴史(上・下)

オーランド・ファイジズ【著】



(上) ISBN978-4-560-08127-3 (下) ISBN978-4-560-08128-0

リン時代の検証の書として意義深い。

本書は、ロシア三都市の「メモリアル協会」の協力のもと、スターリンのテロルに翻弄された数百家族の手紙、日記、写真など、近年まで秘匿されてきた所蔵物を収集記録した、「オーラル・ヒストリー」の金字塔ともいえるべき大著だ。本書の主な役は、ソヴィエト社会のさまざまな階層を幅広く代表する家族であり、有名無名、出身地もロシア全土にわたる五百人にも及ぶ人びとだ。さらに私的資料の背景にあった事情や、家族内で秘密とされた悲劇の聴き取り調査を基礎とした内容は、スター

オーラル・ヒストリーの金字塔

国家があらゆる側面に介入してくる、個人や家族の生活とは、いったいどんなものだったのか? それを明かす中心人物は作家のコンスタンチン・シーモノフだ。ソヴィエト文壇の実力者であり、いわゆる「善良なスターリン主義者」であったシーモノフは、体制にのみこまれた同世代の人びとの葛藤を体現した人物であった。彼の思想と行動を理解することは、すなわちその時代を理解することなのだ。封印されていた「肉声」が胸を強く打つ、もうひとつの「二十世紀ロシア史」。著者は数々の受賞歴を誇る、ロシア史専攻のロンドン大学教授。沼野恭子氏推薦。

疾走中国 変わりゆく都市と農村

ピーター・ヘスラー【著】



ISBN978-4-560-08117-4

中国は今後十年間で米国のフリーウェイの総延長を凌ぐ規模の高速道路建設をめざしているという。この高速道路網がいま、隔絶していた都市と農村を急速に近づけている。

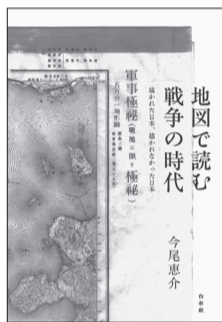
本書は、本格的なモーターサイクリンがはじまったばかりの中国各地をレンタカーで巡り、ときに長期滞在して、都市と農村に押し寄せる変化の激しい、市井の人びとの視点から描いたドキュメントである。

驚愕の日常を生きる人びと

実、北京郊外の農村で生活をともにした魏一家の民宿ビジネスと泥沼の党書記選挙、浙江省麗水市の起業家が手がけた下着製造工場の盛衰など、急激な変化の中を生き抜こうとする人びとの日常を、ユーモアを交えながら多角的・多層的に描く。目の前の問題をいわば即興で切り抜き、小さな交通違反を重ねる彼らのやり方は、日々めまぐるしく変化し、混沌とした社会を生き抜くための生活技術そのものだと言者は言う。

地図で読む戦争の時代

今尾恵介【著】



ISBN978-4-560-08118-1

描かれた日本、描かれなかった日本

「地形図を作り始めたのは、どの国でもたいてい陸軍である。もちろん海軍は海軍が作った。陸であれ海であれ、国を守るために正確な地図が必要であることは当然である。しかし一方、他国を侵略するにも、先立つものは地図であった。」(本書「はじめに」より)

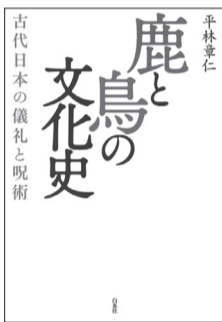
軍港や飛行場などの軍用地、重要な工場や発電所、ダム、鉄道操車場といった場所の地図は、敵国の目から隠すために、ときに別のものとして描かれたり、まったくの空白とされることもあった。

隠された日本のかたち

この本では、さまざまな用途や時代の地図をもとに、日本がかかわった「戦争」の痕跡をさぐっていく。軍用地や軍用鉄道は戦後どのような変遷を遂げたのか。また、日本の支配下にあった朝鮮や台湾、満洲国の地図はいかに描かれていたのか。地図から日本の歩みが立体的に浮かび上がる。掲載地図二一〇点以上。領有をめぐって揺れる尖閣諸島や北方領土の地図も掲載。

鹿と鳥の文化史

平林章仁【著】



ISBN978-4-560-08120-4

古代日本の儀礼と呪術(新装版)

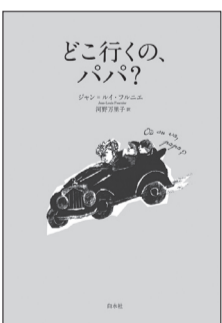
古代日本において、鹿と鳥は霊的な動物として特別な信仰の対象であり、それゆえに祭祀・呪術・喪葬などさまざまな儀礼に登場した。本書は、弥生時代から古墳時代にかけての鹿と鳥にまつわる儀礼や伝承を、さまざまな儀礼に登場した。本書は、弥生時代から古墳時代にかけての鹿と鳥にまつわる儀礼や伝承を、

新たな視野からの古代日本文化論

り、鹿の霊獣視は海人の信仰抜きには語れない。また、弥生土器や銅鐸に描かれた鹿や鹿形埴輪などは、穀霊の復活と再生の農耕儀礼または喪葬儀礼に用いられた。

どこへ行くの、パパ?

ジャン・ルイ・フルニエ【作】



ISBN978-4-560-08112-9

「僕はあまりいい父親じゃなかった。きみたちによく我慢できなくなつたし、愛そうと思つてもなかなかうまくいかなかった。きみたちといっしょに、天使のような忍耐力が必要だった。でも僕は天使じゃない」(本文より)

笑いと涙の自伝的小説

モアに溢れた独特のタッチの著作を二十冊以上刊行している。

ここが違う、ヨーロッパの交通政策

片野優【著】



ISBN978-4-560-08124-2

地球温暖化が懸念される現在、日本の道路行政は相変わらず有効な方策を見出しかねているかに見える。そうした現状を転換すべく、「時代を先取りするヨーロッパの交通法」「世界をリードする自治体の交通政策」「人間と自転車中心の街づくり」等全五章において、その果敢な取り組みと成果を紹介する。

街が変わる、楽しくなる!

ンドンでは所定エリア進入車に一日五ポンドの渋滞税が課せられ、〇六年、ストックホルムでは時間帯ごとの渋滞税課税システムが発足した。その他にも、新車に二五%の消費税十一八〇%の登録税を課すデンマーク、パーク&ライドシステムを導入し、市街での公共交通(LRT他)と自転車の利用による車社会からの脱却をはかる諸都市の試み……。全二三節で詳細に報告されるこうした交通法のあり方とその取り組みは、市街地の空洞化、交通渋滞、大気汚染等の問題を抱える日本の都市を考えてゆく上で大いに参考になるに違いない。官庁、地方自治体の関係部署、さらには交通問題に関心を寄せる市民団体、学生の必携書。

「エクス・リプリス」 兵士はどうやってグラモフォンを修理するか

サーシャ・スタニシチ「作」



一九九二年に勃発したボスニア紛争の前後、ある少年の目を通して語られる、小さな町とそこに暮らす人々の運命。

語り手は、ボスニアの小さな町ヴェシエグラドに生まれ育った少年アレクサンダル。祖父スラヴコは筋金入りの共産党員であり、豊かな想像力と語り続けることの大切さを教える。カール・ルイスが世界記録を打ち立てた日に祖父は亡くなるが、アレクサンダルは祖父の遺志を継ぎ、故郷と家族の物語を紡ぎ始める。曾祖父の田舎での収穫祭、ある日を境にティトの肖像

「エクス・リプリス」 ヴァレンタインズ

オラフ・オラフソン「作」



アイスランド出身の実力派による、珠玉の第一短編集。一月から十二月まで、一年の各月の名前が冠された12編には、夫婦や恋人たちの愛と絆にひびが入る瞬間が鋭くとらえられている。

〔四月〕オスカルとマルガリエータは、湖畔のロッジで週末を過ごしている。夕食後、もう遅いと妻が止めるのも聞かずに、オスカルは幼い息子を連れて湖に出るが、ボートが転覆し、息子とともに溺れかける。その夜、助けてくれた隣人たちと語り合ううちに、夫に対するマルガリエータの不信感が大きくふくらんでいく。

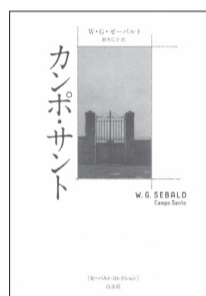
12の〈愛〉のかたち

〔九月〕アメリカ人で見栄っ張りな実業家の夫マークと離婚寸前のエツダ。気の弱い彼女は、友人の計らいで單身パリに飛ぶ。新しい恋に出会い、自分を取り戻しつつあったある日、ふと入った骨董屋で、かつて慈善オークションに参加した夫が法外な値段で競り落とした彫像と再会する。

プロットも文章もきわめてシンプルだが、繊細かつ鋭い感覚によってとらえられた感情の微妙なゆらぎが鮮やかに描き出される。登場人物は、作者と同じくほとんどがアイスランド人で、アメリカや母国で暮らしている自己中心と内省を感じさせる人物が多い。本書のアイスランド語版は、二〇〇六年度アイスランド文学賞を受賞。抑制のきいた文章の行間からは、アイスランドのひんやりとした空気が伝わってくる。◇岩本正恵訳 四六判 二七四頁 定価 三二〇円(本体二四〇〇円)

「ゼーバルト・コレクション」第5回配本 カンポ・サント

W・G・ゼーバルト「著」



本書はゼーバルトの死後に編まれたアンソロジーで、前半に遺稿となった表題作、「アジャクシオ短訪」など、コルシカ島をめぐる四編の散文作品後半にカフカ、ナボコフなど、作家が愛した文人についてのエッセイと批評を収録している。

「聖・苑」は、〈私〉がコルシカ島ピアナの墓場を訪ね、墓飾りや墓碑に関する思い出、亡霊によく出会う、死者がまだ傍らに居ることなど、脳裏に浮かぶさまざまな想念が行き交う、ゼーバルトらしい作品。「スイス経由、女郎屋へ カフカの旅日記によ

すばらしい墜落

ハ・ジン「作」



本書は、アメリカの中国系作家ハ・ジンが、異郷で暮らす人々の苦勞と希望を描いた短編集である。

登場する中国人たちは、アメリカにくればチャンスがあると期待していた。だがいざ来てみると現実は厳しい。給料不払いと失業のためホームレスの危機に陥る青年(「すばらしい墜落」)や、介護職ゆえの苦悩に直面する女性(「年金問題」)のように、都会には故郷と違う苦勞がある、と思知らされる。そして、アメリカ生活に適応すれば一方で、嫁

異郷で思う、家族の絆

姑のいさかきを仲裁しようとする男性(「板ばさみ」)や、孫への「今風」な名づけに仰天する祖父母(「子は敵のごとし」)のように、故郷の家族とのカルチャー・ギャップに苦しむことになるのだ。

登場人物はみな異郷で生きぬく覚悟をしているが、それでも望郷の念や遠く離れた両親への愛がどの物語にも見え隠れする。彼らの苦勞や心情は、現代日本の社会問題や、都会人が抱える孤独感とかさなり、中国本土からニューヨークへ渡った移民の物語でありながら、驚くほど身近に感じられる普遍性を持っている。必死に未来を切り開こうとする人々の姿に、共感と、切なさ、しみじみとした読後感を覚える傑作短編集。◇立石光子訳 四六判 二六六頁 定価 二五二〇円(本体二四〇〇円)

菊池寛と大映

菊池夏樹「著」



太平洋戦争が勃発した直後の昭和十七年一月、大日本映画製作株式会社(大映)が誕生した。臨戦体制下、それまで五社あった映画製作会社が政府との折衝の結果、東宝、松竹、それに日活、新興キネマ、大映が合併した大映の三社となり、当時新興キネマの代表者として京都撮影所長をしていた永田雅一が、大映の責任者となったのである。

しかし、社長は空席のままだった。永田はひそかに、文壇の大御所、菊池寛を社長に迎えたいと思っていた。菊池寛の後ろには芥川龍之介、川端康成

字幕の名工

高三啓輔「著」



字幕翻訳家の第一人者として知られる戸田奈津子氏がこの稼業に入ろうとしたきっかけは、キャロル・リード監督作品「第三の男」(一九四九年)で、男の秘密を知るポベスコが酒場でつぶやく「今夜の酒は荒れそうだ」というせりふを目にしたからだという。

この字幕をつけたのが本書の表題にもある秘田余四郎で、戦前から戦後にかけて、英語圏でもう一人活躍した清水俊二とともに、フランス語圏を中心とした字幕翻訳で鳴らしたことで知られている。

誰もが知っている映画の影の立役者

から四文字程度で、内容を観客にわかたせらなくてはならない。日本語のセンスがもつとも問われる仕事のひとつともいえる。

秘田余四郎は昭和四十二年に死去するまで、東和映画が配給した百七十七本のフランス映画のうち百三十二本の字幕を手がけた。「望郷」「旅路の果て」「肉体の悪魔」「禁じられた遊び」「モンパルナスの灯」など、映画史に残る名作は数限りない。東和映画の創立者・川喜多長政は秘田の面倒をよく見、彼もまた川喜多に生涯を預けた。本書は、インターネット無頼を自認しながら字幕翻訳への道を志した男の人生を、元朝日新聞記者が万感のオマージュと丁寧な取材を基に書き下ろした力作で、映画ファンのみならず知的満足を得られる好著だ。◇四六判 二四〇頁 定価 二五二〇円(本体二四〇〇円)

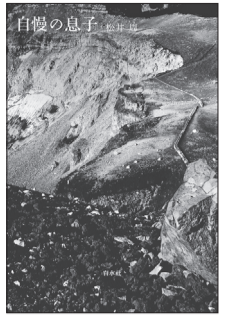
文豪とラッパのビジネスモデル

吉川英治といった流行作家たちが数えきれないほどおり、他社ではどうも真似できない文芸路線が築ける……。翌一月、松竹の大谷竹次郎らとともに文藝春秋を訪れた永田は、初めて菊池寛と会う。事前の調整ですでに社長就任の承諾を得ていた。

当時の大映は、嵐寛寿郎をはじめ、片岡千恵蔵、阪東妻三郎、市川右太衛門など、錚々たる俳優陣を抱えており、新社長のもと、大映は順調なスタートを切った。妙にウマの合った二人ではあったが、昭和二十三年三月、菊池寛の急逝によって二人の蜜月は終焉を告げられる。本書は、菊池寛の孫である著者が、これまであまり触れられることなかった祖父と大映との関係を、綿密な調査を基に描いたノンフィクションだ。◇四六判 一三七頁 定価 二五二〇円(本体二四〇〇円)

自慢の息子

松井周「作」



「ここに描かれているのは、単に、ひきこもりの息子とその母親との関係ではない。独自の手法は文字通り演劇的で、演劇なればこそ果たしうる作業を為した作品だ」——岩松了

「松井さんの内省的な世界が、もうひとつリアルに世界と結びつけば、さらなる名作が生まれるのではないかと期待している」——鴻上尚史

「正という息子が『王国』を作ったというセンタアイデア、首に万歩計をつける母というイメージは、悪くない」——坂手洋二

「わかる人だけわかってくれればよい」

エゴ・サーチ

鴻上尚史「作」



エゴ・サーチとは、インターネット上で、自分の本名やハンドルネームを検索すること。最近では、自分の個人情報が出ていないか確認するために、有名無名にかかわらず定期的にエゴ・サーチするのがよいと言っている。また、就職試験にさいしては、採用する側が、応募者の名前を検索することも普通になってきた。インターネットには、あなたの知らないあなたの情報があるかもしれない……。

物語の主人公は、エゴ・サーチ

国家と私をめぐる愉快的考察劇

「近親相姦を感じさせる兄と妹は、北欧の神話（ジークフリートとブリュンヒルデ）も深読みさせる」——野田秀樹

「松井作品を理解するには、ガラスの破片を目にあてたときの、向こうの歪んだ風景を見るような目眩を評価できるかに関わる」——宮沢章夫

＊ ＊ ＊

お宅は私の国に勝手に侵入しているが、いかがなものか？「名づける」という行為がはらむポストコロニアルな物語——表題作（第55回岸田國士戯曲賞受賞作品）のほか、母親と息子の関係をサンプリングする『家族の肖像』を併録。

◇四六判 一九〇頁 定価二二〇〇円（本体二〇〇〇円） 4月下旬刊

探偵小説の室内

柏木博「著」



さまざまなるものを集積した室内は、そこに生活する人々に固有のものとなっていく。そして、そこで過ごした時間の記憶は、その空間に集積され、さまざまなものに結びつけられていく。

室内、つまりインテリアということには、屋内という意味とともに、「内面的」「精神的」といった意味もあるように、室内からは、そこに生活する人の内面性や精神性が映し出される。不在の人間が残したさまざまな出来事や行動。その人間の内部を映し出す、装置としての室内から浮かぶ多種多様なもの。それらが探偵小説

人間の不在から浮かぶもの

たとえばエドガー・アラン・ポーの『赤死病の仮面』に登場するプロスペロ公の室内は、いかにもケレンに満ちて、彼が異様な感覚をもった人物であることが伝わってくる。ポーは彼の風貌や体格、年齢についていっさい記述をしておらず、すべては室内によって物語らせている。一方でジャン・パトリック・マンシエットの『眠りなき狙撃者』のように、できるだけ室内を描かない、あるいは室内に執着しない人物を描くことで、謎めいたイメージを伝える作品もある。

本書はデザイン史研究の第一人者が、多くの小説で描かれるそれら室内の模様を、作品を深く読み込みながら探った力作である。

◇四六判 二四六頁 定価二五二〇円（本体二四〇〇円）

サスペンフルな恋愛戯曲！

の結果、「自分」とまったく同じプロフィールを持つ人物のブログを発見した新人小説家。彼が書きすすめているのは沖繩の離島を訪れた女性が妖精キジムナーに魂をいやされる話なのだが、どうにも筆がすすまずに書きあぐねている。はたして、もう一人の「自分」の狙いは何なのか？

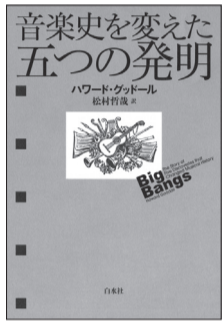
ダメンズ好きの女性編集者、売れたがりのストリート・ミュージシャン、カメラマンをめざす青年、怪しいIT関連会社「エゴ・サーチカンパニー」の面々も加わり、物語は入れり構造的に謎めいてゆく！

「ずっと誰かが覚えていれば、その魂は永遠に生きていくんだ。」というセリフが多くの観客の胸をつかんだ、サスペンフルかつ笑いもふんだんな恋愛ファンタジー。

◇四六判 一九六頁 定価一九九五円（本体一九〇〇円）

音楽史を変えた五つの発明

ハワード・グッドール「著」



本書は通史としての「音楽史」ではない。西洋音楽千年の歴史において重要なターニングポイントとなった、「記譜法」「オペラ」「平均律」「ピアノ」「録音技術」という五つの事物を、それが一般社会にもたらした影響を含めて、深く掘り下げたユニークな音楽史である。

現在のよう楽譜は、いつ、どのような需要から、誰が生み出したのか。こういった疑問から始まって、いずれの章でも、発明品それ自体の歴史はもちろん、それらが誕生したことによって初めて可能になった音

作曲家の視点から語る音楽史

楽上のルールや概念、楽曲の作風なども解説される。そのあいまにはたとえば、「楽譜が存在しなかった時代に、カトリックの修道士たちが覚えて歌わなければならなかった典礼音楽は、続けて演奏すると約八十時間になり、ベートーヴェンとワーグナーの全作品に等しかった」など、目からウロコの話題や意外なエピソードもふんだんに盛り込まれている。

また、本書では、社会と音楽「発明」の（さらには「発明」同士）の相互作用についても重点が置かれている。

イギリスの人気テレビ番組を元に、番組の制作にあたった作曲家が軽快な筆致でつづる、ユニークな西洋音楽史。

◇松村哲哉訳 四六判 二七六頁 定価二七三〇円（本体二六〇〇円）

カラヤン 自伝を語る

フランツ・エンドラー「記」



カラヤンには壮大な自伝を書く希望がかねてからあったが、年齢と病を重なるうちに不可能になってしまった。だが八十歳を機に自伝を口述して出版することになった。聞き手はアンチ・カラヤンの先鋒として知られた批評家のフランツ・エンドラー。彼は鋭い疑問を投げかけることでカラヤンの記憶を呼び起しつつ考えを導き出し、約三年間に渡って証言を書きとめた。本書は、ウィーン音楽院時代から地方劇場での下積み時代、ナチズム時代と第二次大戦後の試練を経て、ベルリンフィルを

野心に満ち溢れた音楽人生の軌跡

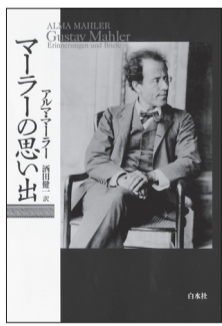
勝ち取り玉座にかけのぼるまでを自ら語った貴重な証言集となっている。ライバルであり、それまで発言を避けてきたフルトヴェングラーとの出来事を思い出したように語ったカラヤンの声に、皮肉と多大な感慨を聞き取ったとエンドラーは記す。ライバルたちとの駆け引きについてや「トスカニーニとフルトヴェングラーの意図を結びつけることが夢だった」などの言葉を引き出したのも、聞き手のエンドラーの功績による。

「音楽のない生活は私には考えられない」——楽壇の帝王カラヤンの意欲と野心に満ちた音楽人生の軌跡と、世界に対するラストメッセージが本書に凝縮されている。復活祭フェスティバルなどの写真十六点を収録。

◇吉田仙太郎訳 四六判 二七二頁 定価二九四〇円（本体二八〇〇円）

マーラーの思い出

アルマ・マーラー「著」



十九世紀ドイツ音楽の栄光と没落を身をもって生き、またこの音楽世代に終止符を打つことを運命づけられたグスタフ・マーラー。本書は、この偉大なる楽匠の最後の十年間、伴侶となつて苦楽をともにしたアルマ・マーラーによる回想である。

「きみはきみの将来をそのすみずみまで私の欲求に依存させ、そして私の愛以外のなものもその見返りとして望んでならない」。

才気煥発で作曲に生きがいを感じ、美貌をうたわれた二十二歳のアルマは、「二晩泣きあかした」末にこのマーラーからのプロポーズを受け入れた。「私はあのとき私の夢を葬ったのだった」。

二人の共同生活はまさに破局の寸前までゆく。ただ、マーラーの死が辛うじてそれを支えきった……

回想は、敗北の無念、抑えきれない悔恨と憤懣で澱のようによどんでいるが、それは世紀末ウィーンから第三帝国の破産に至る、〈暗い時代〉を映し出す真摯な証言でもある。

マーラー没後百年。回想と手紙の二部構成で、偉大な楽匠とその時代を浮かび上らせた記念碑的著作の新装版！記念映画『マーラー君に捧げるアダージョ』もあわせて全国公開される。◇酒田健一訳

四六判 四四〇頁十口給六頁 定価四四一〇円（本体四二〇〇円）

マーラー没後百年！

ルマは、「二晩泣きあかした」末にこのマーラーからのプロポーズを受け入れた。「私はあのとき私の夢を葬ったのだった」。

二人の共同生活はまさに破局の寸前までゆく。ただ、マーラーの死が辛うじてそれを支えきった……

回想は、敗北の無念、抑えきれない悔恨と憤懣で澱のようによどんでいるが、それは世紀末ウィーンから第三帝国の破産に至る、〈暗い時代〉を映し出す真摯な証言でもある。

マーラー没後百年。回想と手紙の二部構成で、偉大な楽匠とその時代を浮かび上らせた記念碑的著作の新装版！記念映画『マーラー君に捧げるアダージョ』もあわせて全国公開される。◇酒田健一訳

四六判 四四〇頁十口給六頁 定価四四一〇円（本体四二〇〇円）

将棋のチカラ

阿久津主税 著



ISBN978-4-560-08114-3

将棋の解説を味わう！／第四局 棋士としてのプライド／第五局 将棋の棋譜を指で覚える！／第六局 「将棋ガール」のすすめ／第七局 将棋の疑問にお答えします！

巻末付録の「将棋の基本ルール」や、守りの囲いや攻めの陣形などについての図解コラムも充実。

将棋をこれからはじめたいという人はもちろん、久しぶりにチャレンジしてみたいという中級者・上級者——パワーアップしたいあなたのために、プロ棋士の阿久津主税さんが、将棋ならではの魅力について、楽しく語りまします。

初心者から高段者まで楽しめる、肩のこらない将棋の話です。読めばあなたも将棋ファン、阿久津流七番勝負へようこそ！(第一局 将棋の順路を案内します！／第二局 人生観が顔を出すボードゲーム／第三局

渡辺明初代永世竜王、推薦！

豪華な顔ぶれ(渡辺明初代永世竜王・橋本崇載七段・里見香奈女流名人)との対談も収録されています。歴代の名棋士や二十代の若手棋士についても紹介！ポスト羽生世代のプロ棋士による「コミュニケーション術」の現在形がわかります。著者は、一九八二年生まれの将棋棋士(現在七段)。滝誠一郎門下。対局のみならず、NHK将棋講座やテレビ中継解説でも活躍。

ルネサンスの演出家 ヴァザーリ

樺山紘一「序論」 野口昌夫「編著」 石川清、稲川直樹、桑木野幸司、赤松加春江「著」



ヴァザーリ「自画像」

ISBN978-4-560-08128-6

これまでヴァザーリといえば、『芸術家列伝』の作家というイメージがあまりにも強く、芸術家としての活動はそれほど顧みられることはなかった。しかし近年の再評価の中で、専制君主政体をささえる宮廷人として、また、その宮廷の政治的メッセー

ジを視覚的に演出する、トスカーナ公国の芸術政策総監としての側面が、クローズアップされている。

当時のフィレンツェは、共和国からメディチ家の君主政体へと移行したばかりであり、コジモ一世は常に、己の権力の正当性を誇示する必要が

ヴァザーリ生誕500周年記念出版

あつた。この要請に、最高の形で応えたのが、ヴァザーリであった。彼は時には室内デザイナー、時には建築・造園家、そして時には都市設計家の立場から、フィレンツェ公国の芸術政策に深く関わってゆく。言葉を変えらるなら、彼の空間演出の手法を多様な角度から分析することで、ヴァザーリの業績を画家や作家という旧来の枠組みから解放し、より広い文脈から理解することが可能になるのである。

本書は「列伝」の作者ヴァザーリの、建築家、都市設計家、庭園設計家、祝祭演出家としての多方面での活躍を捉えることにより、ルネサンス人ヴァザーリの真の姿を伝えるものである。

◇A5判 三五〇頁 定価四八三〇円(本体四六〇〇円) 4月下旬刊

病める舞姫

土方巽 著



ISBN978-4-560-08125-5

「古典バレエがいかにヨーロッパ起源のものにふさわしく、ゴシック寺院のように上へ下へと垂直に伸びあがる」とするのに対して、暗黒舞踊は頑固に大地に躊躇することをやめない。また、ヨーロッパでは肉体のエネルギーはリズムミカルな運動と

いうかたちで表現することしか知られていないが、暗黒舞踊はこれを断絶、衰弱といったかたちにおいても立派に表現し得ているのである。これが土方巽という天才の発見した、まさしく日本の風土に根ざした踊りの形式ではないかとわたしは思っ

「舞踏の言語」の金字塔

暗黒舞踏の創始者によるシュルレアリスムとしての自叙伝、待望の限定復刻版。豊かな感性が屈曲と変節を重ねながら自らの肉体と同化していく様を、著者の記憶の彼岸に佇んでいた舞台の感動とともに甦らせる。△「そうらみろや、息がなくても虫は生きていよ。あれをみる、そげた腰のけむり虫がこつちに歩いてくる。あれはきつと何かの生まれ変わりの途中の虫であろうな。」言いきかされたような観察にお裾分けされてゆくようなからだのくもらし方で、私は育てられてきた。」という告白からはじまり、蠢動しつづける破格の文体で語られてゆく「舞踏の言語」の金字塔。

◇函入 菊判 一三二頁 定価四二〇〇円(本体四〇〇〇円)

文庫クセジュ

Q955 「SF文学」

ジャック・ボドゥウ 著

ISBN978-4-560-90955-5

■入門書の決定版！

SFは、ここ数十年のあいだに、ナノテクノロジー、仮想現実、遺伝子操作などのあらたなモチーフが加わり、他の小説ジャンルとの融和もおこっている。変幻自在の、きわめて定義が難しいジャンルだ。本書は、その起源(シェーリ、ポー、ヴェルヌ、ウェルズ)、国ごとの歴史(アメリカ、イギリス、フランスなど)、主要テーマ(宇宙、時間、ロボット、クローンなど)からジャンルの全体像を概観できるすぐれた案内書となっている。細胞生物学の学者でありながら大衆文学研究者として知られている著者は、SFの正典、古典作品をしつかりふまつつも、日本の一般読者にとつてはやや意外な作家に言及したり、邦訳のない作品も挙げている。巻末には充実した索引を収録。巽孝之氏も推薦する本書は、かの「スタージョンの法則」の10パーセントに出会うための手引き書だ！

◇新島進訳 新書判 一七四頁 定価一一〇三円(本体一〇五〇円)

Q956 「西洋哲学史

パルメニデスからレヴィナスまで」

ドミニク・フォルシエ 著

ISBN978-4-560-90966-2

■これからの哲学を展望するために！

二五〇〇年にわたる西洋哲学の歴史を語るにあたって、著者の姿勢は明解だ。哲学とは、なによりも本質的なものについての言説であり、それは、樹木のように成長したのちに枝分かれしたり、時を経て開花するものとさえ、膨大な哲学的諸作品の核をなす根本精神を紹介するといつものだ。ソクラテスの約七十年前に、パルメニデスが存在と思考の同一性を述べたのを哲学の始まりとし、主な哲学者についてほぼ年代順に簡潔に解説してゆく。二十世紀の終わりには、「未来倫理」を展開するヨナス、そしてレヴィナスでしめくくっている。そこには、科学やテクノロジーの目覚ましい進展によつて、人間の存在や本性に変更がもたらされるかもしれない二十一世紀における哲学への予感が漂っている。

◇川口茂雄、長谷川琢哉訳 新書判 一八八頁 定価一一〇三円(本体一〇五〇円)

Q957 「DNAと犯罪捜査

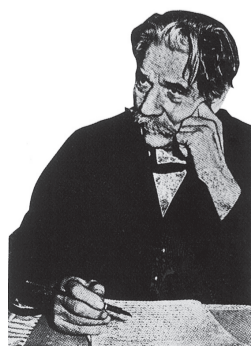
各国の現状とデータベースの発展」

フランソワ・ベルナル・ユイグ 著

ISBN978-4-560-90957-9

■今の技術ではどこまでわかるのか？

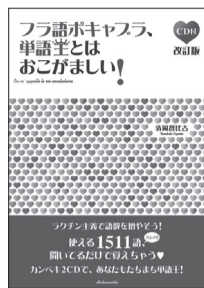
事件現場に残された遺留品をDNA鑑定した事件は、この十年間で約八十倍に増加した。さらに、監視カメラのDNA型データベースには、現在二万件のデータが登録されているという。本書は、DNAの採取・分析方法を、具体的な事件のエピソードをおりまぜながら紹介し、各国においてDNA鑑定結果を保存するデータベースの構築がどのように進められてきたかを解説する。めざましく鑑定精度があがったとはいえ、DNAがどれほどデリケートなもので、頼りすぎることがいかに危ういか、また、他国ではデータベースの創設・運用についての議論がどれほど重なり、詳細が法律で定められているのか……など、日本のDNA鑑定にもかかわる示唆に富んでいる。関西医科大学医学教室の赤根教授による解説「日本のDNA鑑定」も収録。◇安井亜希子訳 新書判 一五八頁 定価一一〇三円(本体一〇五〇円) 4月中旬刊



大学教授であり、世界的なパッハの演奏家でもあったシュヴァイツァーは、その地位と名声を捨てて、貧困にあえぐアフリカの原始林で医療と伝道に献身した。本書は、十九世紀から二十世紀初頭のヨーロッパ文明がかかっていた危機の先覚者のひとりとして新しい救済を唱えつづけた博士が、自らの生い立ち、アフリカでの事業、そして愛と平和に捧げた半生を回顧した自叙伝である。しかし、訳者の竹山道雄氏が語るように、普通の自叙伝のように個人的な情念の記録ではなく、当時のヨーロッパ文明を背景に、ひとりの人間の信仰をその生活によって証したものである。現代はいかなる時代か、我々はいかに生きるべきか——深い信仰をもって何度も挫折を乗り越えた博士は、本書においてその大切な答えを示してくれる。◇竹山道雄訳 新書判 二九四頁 定価一五七五円(本体一五〇〇円)

「フラ語ボキャブラ、単語王とはおこがましい!」[改訂版][CD2枚付]

清岡智比古 [著]



「フラ語シリーズ」を愛する多くの方のご要望にお応えして、CDをつけちゃいました。しかも2枚! 単語数もすこ〜し増やして1511語(またしてもハンパ!)。例文は、「こんなこと言えたらいいな」という厳選されたものばかり。CDには、単語+例文を「日本語→フラ語」の順に収録し、しかも、男性形・女性形を覚えやすいよう工夫しています。今すぐ白水社ホームページで見本ページと音声をチェックしてみてください。読んで楽しく、聞いたらもっと楽しいこの本があれば、電車に乗りながら、散歩しながら、家事をしながら、はたまたジムでトレーニングしながら、あなたもたちまち単語王に!

◇2色刷 A5判 256頁 定価1995円(本体1900円)

「中級フランス語 あらわす文法」 東郷雄二 [著]



「中級フランス語」は、一歩先のフランス語をめざす人のための三冊シリーズです。第一弾の本書「あらわす文法」では、40の問題が出されます。一見するとどれも初級文法を終えていけばかんたんにできそうな問題です。ところが、問題を解いていくうちに、初級文法で教わったことでは手に負えないものがあることが明らかになるでしょう。明快な解説を読み進むうちに、無味乾燥に思える文法の中に確かな「くしみ」が見えてきます。隠れた「くしみ」を意識して、よりフランス語らしい表現を自分のものにしましょう。(続刊予定:「つたえる文法」「よみとく文法」)

◇四六判 187頁 定価1995円(本体1900円) 4月中旬刊

「ニューエクスプレス ハンガリー語」[CD付] 早稲田みか、バルタ・ラースロー [著]



ハンガリー語はフィン・ウゴル語派に属し、主としてハンガリー共和国で使われている言語です。ヨーロッパの中央部に位置しながら、その周辺諸国で使用されている言語とは文法や語彙が全く異なりますが、表記はラテン文字で、発音も特に難しいものではありません。首都ブダペストは「ドナウの真珠」と形容される美しい都市で、荘厳華麗な歴史的建造物が立ち並んでいます。リストやバルトークなどの偉大な音楽家、ヘレンドをはじめとする名窯、パプリカを使ったハンガリー料理……。誇り高きマジャール文化に、言葉から親しんでみませんか?

◇A5判 143頁 定価2940円(本体2800円)

「ニューエクスプレス ベンガル語」[CD付] 丹羽京子 [著]



ベンガル語は、バングラデシュの国語でありインド・西ベンガルの公用語。華麗なベンガル文字は、詩人タゴールを生み出した芸術を愛する風土を思わせます。ベンガルトラの生息する豊かな自然、世界遺産をいくつも有する魅力あふれるところ。急速な経済成長と共にこれから注目度がますます上がることでしょう。言葉を携えて行ってみませんか、コルカタからダッカまで二つのベンガルへ。巻末にはタゴールの詩の1編の抜粋を音源と共に収録。(白水社ホームページで試聴できます)

◇A5判 151頁 定価3150円(本体3000円)

学習辞典の決定版、待望の刊行!

プリーモ伊和辞典 和伊付

[シングルCD付]

秋山余思 [監修]

高田和文、白崎容子、岡田由美子、秋山美津子、マリーサ・ディ・ルツィ、カルラ・フォルミサーノ [編集]

見出しは見やすいランク別2色刷、重要語には英語併記。固有名詞も豊富に収録、使える和伊語彙集とEメールの書き方を付し、パスタ、サッカーなど図版多数。発音と会話のシングルCD付。



【語数】伊和 33000+和伊 8000

【発音表記】カタカナ+発音記号(重要語)

◎全見出しカナ発音付

◎重要動詞には現在形を表示

◎充実した和伊語彙集(50音順+ジャンル別)

■函入 ■B6変型 ■2色刷 ■1487頁 ■定価4935円(本体4700円)

自然な日本語を伝える外国語へ

シリーズ《日本語から考える!》



日本語のプロと外国語のプロが力を合わせた画期的なシリーズ創刊。文法だけではわからない日本語と各言語との考え方の違いを楽しみながら、日本語の自然な発想を外国語にしていく過程を伝授します。そもそも「外国語らしさ」とは何なのか。

日本語解説および設問はシリーズ共通なので、日本語と外国語の違いのみならず、全巻を通してみると、他の外国語との発想の違いも楽しむことができます。

◎ラインナップ◎ 各巻 ■四六判 ■165頁 ■定価1995円(本体1900円)

「日本語から考える! 中国語の表現」 永倉百合子、山田敏弘 [著] ISBN978-4-560-08555-4

「日本語から考える! 韓国語の表現」 前田真彦、山田敏弘 [著] ISBN978-4-560-08556-1

「日本語から考える! フランス語の表現」 佐藤康、山田敏弘 [著] ISBN978-4-560-08557-8

「日本語から考える! スペイン語の表現」 長谷川信弥、山田敏弘 [著] ISBN978-4-560-08558-5

「日本語から考える! イタリア語の表現」 大上順一、山田敏弘 [著] ISBN978-4-560-08559-2

「日本語から考える! ドイツ語の表現」 清野智昭、山田敏弘 [著] ISBN978-4-560-08560-8

こんな日本語をあなたの好きなあの外国語で伝えられますか

- わあ、おいしそう。
- お茶がはいましたよ。休憩しましょうか。
- 「あら、どちらへお出かけですか。」「ちょっとそこまで。」

リレーエッセイ ことば紀行

第6回

「ハンガリー語」 早稲田みか

- 【主な使用地域】ハンガリー共和国とその周辺
- 【話者数】およそ1500万人
- 【使用文字】ラテン文字
- 【あいさつしてみよう】
Jó napot kívánok!
ヨー ナポト キーヴァーノク
(こんには)



ブダペストのリスト広場にあるリストの銅像

リストで行列

今年2011年は、音楽家リストの生誕200年。世界各地で記念の催しが行なわれている。ハンガリーでもリストにちなんだ大小さまざまなコンサートが連日のように開かれている。

リストは1811年、当時のハンガリー王国領に属していたドボルヤーン Doborján (現在はオーストリア領の Raiding) に生まれた。父親はハンガリー人、母親はオーストリア人だったと言われている。この地域はドイツ語を話す人々が多く暮らしており、リストの母語もドイツ語だった。ハンガリー語はまったく話せなかったが、リスト自身は折にふれて自分はハンガリー人であると公言していた。

リストが生まれた19世紀初頭は、言語が民族意識や国民意識とまだそれほど強く結びついていない時代だった。ハンガリーの貴族や政治家たちも、その多くはハンガリー語を話せなかった。リストは何人かをめぐって論争が持ち上がったのは、第一次世界大戦後、リストの生誕地がオーストリア領になってからのことである。当のリストは自分はハンガリー人だと言いながら、パリやワイマール、ローマなどヨーロッパ中をまたにかけて活躍したコスモポリタ

ンだった。今風に言うなら、真のEU市民ということになるのだろう。

リスト Liszt という名字は、ハンガリー語の綴りである。姓名は、ドイツ語では Franz Liszt (フランツ・リスト)、ハンガリー語では Liszt Ferenc (リスト・フェレンツ)。ハンガリー語は日本語と同じように、名前を姓・名の順に書くので、ドイツ語とハンガリー語では姓と名の順序が入れかわり、名も Franz と Ferenc のように、それぞれの言語の名前になっている。

ハンガリー語のアルファベットはラテン文字を使用して書くが、ラテン文字2つ(あるいは3つ)を使って1つの音を表すものがいくつかある。そのひとつが Liszt の姓に含まれている sz[s] である。ちなみに、s はシュ [j] と発音する。そこで、ハンガリーの首都 Budapest は、ハンガリー語の発音では「ブダペシュト」となる。

ところで、ハンガリーにはこんな小咄がある。戦後の食糧難の時代、街角で人々が行列しているので、何の行列かとたずねると、リスト liszt だとの返事。てっきり「小麦」が手に入ると思って並んでいたら、売っていたのはリスト作品の演奏会の切符だった。そう、liszt はハンガリー語で「小麦」を意味する単語なのである。(大阪大学教授)

山姥の辞書

小池昌代

(一)「茹でる」

長く外国で日本語を教えている鷺津さんが、十年ぶりに帰国し、わたしの家へ遊びに来た。

鷺津さんがやってくるという場合、ただ単に来るのではない。ある目的が常に伴っている。ワンタンを作りに来るのである。

ワンタンというものに、わたし個人は郷愁を持っているが、それは食が極端に細かった子供の頃のわたしが、唯一好んで食べた中華料理だったから。

今、わたしは、人の倍は食べるおばさんになった。中華料理屋へ行って、ワンタンを注文することはない。あれほど、食べた気にならない料理も珍しいと思う。汚い比喩で恐縮だが、皮のなかに入っている具はどう見ても鼻くそだ。乳首ほどのものもあるが、いずれにしても、どうせ腹に収めるのなら、餃子くらいはあってほしいもの。あれはどう考えても少なすぎと思う。

鷺津さんが作るワンタンはあのよう

に貧しいものではない。餃子に負けない充実した具を、はかない薄皮が包んでいる。

彼の創意はスープにもあり、そのいちいちを、ここであげないけれども、すべて簡単に手に入る材料によって、街の中華料理屋さん以上の美味を作る。鶏ガラをこつこつと煮込むといった時間のかかるものではないので、味の子測がたないのだが、意外な組み合わせとバランスによって、ほ、と驚

く奇跡の味ができる。よい材料さえ揃えれば、おいしいものができるのは当たり前だが、制約のなかでおいしいものを作り出すのは、果敢な実験精神と創造力が必要だ。

鷺津さんは一時期、本気でワンタンと餃子の店を開こうとしたらしいが、奥さんの反対でとりやめた。それを聞いたときわたしは、「えー、なぜやめたの、わたし、毎日店に通うのに」と言った。あれは嘘だ。毎日通えない。通わない。だいたい、鷺津さんの身になってみても、毎日ワンタンを作り続けるというのは簡単なことではない。奥さんはすべてを見通していた。十年ぶりに鷺津さんがやってくるというので、わたしは家族は、昼も食はずに彼を待った。十年前、鷺津さんが日本を出るときにも、彼はうちへ来てワンタンを作ってくれた。そのとき、うちの子供は生まれたばかりで、言葉もしゃべらず、部屋の床にころがされていた。今は小学生。

やってきた彼は驚くべきことに、十年前と瓜二つ。野人の風貌もそのままである。わたしは変わった。いろいろなことがあったから。しかし近況は互いに話さない。

彼はお茶も飲まず、台所に立つと、子供を助手にワンタンを作り始める。ねぎを刻んで挽肉まで。大鍋からは湯気がもうもうと立ち上っている。そのなかへ、ワンタンの雲を掴んで落とす。次々、落としていく。白濁してくる鍋の中。いくつ食べるの。わたし

十個。おれ十五。

◇こいけまさよ一九五九年東京生まれ。著書に、詩集『コルカタ』『ババ、バサラ、サラバ』『永遠に來ないバス』、小説『タタ』『エッセイ』『屋上への誘惑』など。近著に『弦と響』。

鎌田浩毅

「知的生産」のための術語集

第1回

「知的生産」の時代は終わらない
—序にかえて

私は火山を研究する理系フィールドワーカーである。野山を歩き回り、地質学の切り口で地球と世界を理解するの

のがその仕事であり、調査に向いた地域の地表に露出するすべての岩石を見てきた。地面だけでは足りない場合には、ボーリングで穴を掘って地下の岩石の所在まで突き止めることもする。こうして一見、雑然と転がっている岩石の中から本質を導き出し、それを新知見として世に発表する。文字どおり、大量の石から玉を見い出す作業が、「知的生産」としてのフィールドワークなのである。

こうしたフィールドワークは、京都大学の伝統でもある。今西錦司をはじめとして梅棹忠夫など名だたるフィールドワーカーが、生物と人類に関する新しい視座を与えてきた。彼らは本拠地を京都に構え、グローバルズの価値観で動く東京の流れとは一線を画して研究を進めてきた。これには京都という土地柄

がもつとも適しており、ユニークな学問を次々と産み出すことに成功した。たとえば、東京が世界に「勝つ」都市であるとすれば、京都は「深める」都市とも言える。めまぐるしく変転する世の流れを冷静に見きわめるには、この古都に閑居することが必要なのである。

さて、フィールドワークは、そこに存在しているだけで、まだ何の価値も与えられていないものを相手にする。混沌となった多様性の世界から、意味あるものを抽出していく。物理学の用語を使えば、増大したエントロピーを減らして一般則を抽出する。フィールドワーカーはこのための堅固な方法論を持っており、

梅棹忠夫はその最先端を走っていた研究者であった。彼は優れたフィールドワーカーであるだけでなく、ビジネスパーソンにも通用する「知的生産」の技術の持ち主でもあった。これが一九六九年に刊行された『知的生産の技術』(岩波新書)として結実され、今風に言えば彼はライフハックの元祖となった。

ちなみに、梅棹が活躍した高度成長時代は、戦前から日本論壇をにぎわせてきた教養論が大きな転換期を迎えた時期でもある。阿部次郎や寺田寅彦らを嚆矢とし、旧制高等学校を舞台とした「大正教養主義」に置き換わるものを大衆が求め始めたの

科学者が論じる「知的生産」論

その結果、読書人たちは関心のスポットライトを「教養」から「実践的ノウハウ」へと移していった。すなわち、役に立つもの、形になるもの、そして結果を出せるものへの、人々の欲求は尽きることなく進んでいった。この流れはオピニオンをリードする論客にまで押し寄せ、大量の書籍が巷に溢れることとなった。二〇〇三年に出た竹内洋著『教養主義の没落』(中公新書)は、その象徴的な書籍だったとも言えよう。

一方で、書物が氾濫するにつれ言葉がインフレーションを起こし、既成概念が次々と溶解していった。もともと学術の専門用語であったものが、それぞれの文脈を離れて軽薄

短小な状況へ拡散し、最後に霧消していく事態が生まれてきた。ここでは天才的メディア学者のマクルーハが指摘したように、テレビによる席巻が無視できない効果を与えた。何を言っているのか分からないながらも、映像が言葉を駆逐していったのだ。珍奇な言葉のシールが至る所に貼られ、観念が一人歩きした。赤信号もみんなで渡れば恐くないように、全員が間違っしまえば誰も気がづかなかつたのである。狂乱の二十世紀は何事もなかつたように二十一世紀に引き継がれ、何かが外れたまま幾久しい時が経っているのは、本来

の「知的生産」を支える教養の欠落であろう。また教養を支えるはずの書物の価値下落である。

私は理系のフィールドワーカーでありながらも、世の中で書物の力が低下しつつあることに次第に我慢ならなくなった。というのは、今も昔も書物は学問を蓄積・伝達する上で最大最良のメディアであることには変わりないからである。フィールドワークを開始する前には、文字に書かれた情報を細大漏らさずチェックし、関連書籍は何が何でも入手しなければならぬ。

こうした状況を見て、『知的生産の技術』から四十年が過ぎた二〇〇九年に、私は『知的生産な生き方』(東洋経済新報社)を上梓した。ここでは私自身が火山のフィールドワークで培った「生き方」について述べたが、今回の連載ではフィールドワークの本質抽出法を用いて森羅万象を見渡してみようと思う。すなわち、自らの思考のベクトルを明確にするために、「知的生産」にまつわる術語集を編み直してみたいと思う。言わば、小手先のネット情報革命のために置き去りにされてきた知的世界の言葉について、じっくりと観察し記述するのである。特に、術語を世間の文脈で語るのではなく、科学者の眼で社会に生じたさまざまな関係を柔軟に、かつ奇想天外に論じてみたい。読者の皆さんには、知的生産の上を行く「メタ」知的生産論を楽しんでいただきたいと願う。

◇かまた・ひろき=京都大学教授。理学博士。専門は火山学・地球科学・科学コミュニケーション。著書に『座右の古典』『知的生産な生き方』(東洋経済新報社)、『世界がわかる理系の名著』(文春新書)、『使える!作家の名文方程式』(PHP文庫)、『火山噴火』(岩波新書)など多数。

中国を読む

時事通信外部記者
城山英巳

■中国は日本にいつ追いつくか

このほど中国の改革派法律専門家4人が来日し、日本の司法制度を学ぶ機会があった。4人のうち3人は初来日。約1週間にわたり日本の弁護士と交流したり、裁判員裁判を傍聴したりしたが、司法の独立のない国から来た彼らにとって日本のレベルの高さは想像以上だったようだ。いつしか4人との間で「司法・政治制度の面で、いつになったら中国は日本に追いつくか」という議論で白熱した。

北京大学教授は「30年」。中国政法大学の若手准教授は「500年」。開明的な新聞『南方都市报』記者は「40年」。北京の有名な人権派弁護士、李方平氏は「少なくとも100年」と答えた。第2の経済大国の地位を中国に取って代われ、首相が1年も持たないわが国への過大評価と受け止めたが、どうもそうでもない。

李弁護士いわく「日本の司法制度の開放性は自信を示している。日本の裁判官は被告の話を『聞いてから尋ねる』。中国は『尋ねるだけで聞かない』。日本の人権保護面に感心した」。

実は2009年末、李氏は北京で筆者と会った際、こう言い放った。「日本は中国の人権問題に注目していない。西側国家の中の例外だ」。ちょうど、劉暁波氏(10年にノーベル平和賞受賞)が国家政権扇動転覆罪で懲役11年の判決を受けた直後の時期だった。欧米の大使館幹部は公判に駆け付けたが、日本大使館員の姿はなかったことが批判の原因だった。しかし今回の訪日で日本の印象はだいぶ変わったようだ。

中国の司法制度の問題はどこにあるのか。「市民は『法律』を自分の権利を守る武器としてとらえているが、当局は市民をコントロールする武器として『法律』を使っている」と李氏。この「法律」への意識の違いが、中国で深刻化する「官民衝突」の根源にあるのだ。

◇しろやま・ひでみ=2002年6月から07年10月まで中国総局(北京)特派員。著書に『中国臓器市場』(新潮社)ほか。

謹んで地震災害のお見舞いを申し上げます

地震の影響により、本紙及び商品のお届けが通常より遅れる場合がございます。何卒ご了承ください。

株式会社 白水社

★第55回岸田國士戯曲賞決定!

「自慢の息子」舞台写真

第55回岸田國士戯曲賞(白水社主催)の選考会が2月28日、東京神田錦町・學士會館で行なわれ、選考の結果、松井周『自慢の息子』が受賞と決まりました。



「自慢の息子」舞台写真 (撮影:青木司)

NEWS & TOPICS

★東京国際ブックフェア」出版のお知らせ

第18回「東京国際ブックフェア」に、白水社は「書物復権」8社で共同出展します。

★2011年度版「辞典・語学参考書カタログ」ができました

津あし 本は小倉し。 漫画と書籍の紹介

5月刊行予定の新刊 (2011年4月1日現在)

- 表示価格は5%税込です。書名・刊行時期は変更する場合があります。...

編集こぼれ話

「今回のピックアップ本」 ちよん・ひよんしる著 『やさしくはじめる韓国語』

違いを楽しむ隣の国の言葉

日本で暮らす中で、著者は母語である韓国語と日本語の文化的な背景にいろいろ違いがあることに気がつきました。

そんなわけで韓国語の初級入門書として本書を執筆するときも、言葉の背景となる文化的な事柄についても数多く取り上げました。

編集メモ

連日報道されるニュース映像を見てみると、安易な言葉を口にするのもためらわれま

営業部

先日、読者の方から「辞書を修理してほしい」とのお問い合わせを受けました。

ちよつと気のきいたブログを書いているとたちまち新書執筆の依頼が舞いこむとい

本の十字路 ちよつと気のきいたブログを書いているとたちまち新書執筆の依頼が舞いこむとい

白水社

各紙誌で絶賛! 忽ち重版

デボラ・ソロモン著 林寿美、太田泰人、近藤学訳 『ジョゼフ・コーネル』

ピュリツァー賞受賞作品、佐藤優氏推薦! 『レーニンの墓』

甘く芳ばしいフランス菓子歴史と秘話 『王のパティシエ』

読んだあと、世界が違って見える 『ほとんど記憶のない女』

フランスの「ことばと文化」をお伝えする月刊誌 『ふらんす』

ふらんす 4月号 特集「フランス語でもっと前進!」